

共働き夫婦の生計分担意識を調査・研究

経済・小笠原祐子教授

専門は労働社会学、文 といえば、OLは男性社員で接している日常の場面で、男性社員の方がOLより一般的に下位に位置に気遣うなど、この力関係が往々にして逆転している、子育て中の共働き家庭を対象に調査を行い、家庭内での夫と妻のあり方と就業意識がどう関係しているかを研究している。

出発点は、博士論文でも取り上げた一般職女性社員(OL)とサラリーマン(男性社員)の職場内でのパワーバランスを調査したことだった。

フォーマル(形式的)な社内ヒエラルキーから



研究目標などを語る小笠原教授

それは男性社員には出世の道が開かれており、それゆえに(OLを含めた)部下をうまく使えることが要求されるのに対し、OLは出世から切り離されている「弱さ」があることが、逆に「強さ」につながっているというわけがあることが見えてきた。

生計維持は夫が分担

女性が“進出”できぬ原因は？

長時間労働の問題も研究

うにはなった。しかし、まだまだ男性と同じようには働けない女性が多い中に移ることになった。

コインの表と裏のようなもので、職場の問題は家庭の問題でもある。そこで共働きの家庭を研究するようになるが、ここでしばしば問題になるのが家事分担についてである。

フェミニストの間では、女性の社会進出に比べ、男性の家庭進出(家事分担)はまだまだ進んでいないとよくいわれているが、家事分担だけを取り上げて物事の半面しか見えてこないのではないかと、生計維持分担の意識の調査・研究を始めた。

こうしたことから共働きの家庭では、働いて収入を得ることが、自動的に生計を維持していることを意味せず、生計維持を引き出す必要があるため、回答者も、テーマによって制約がある個人

就業意識問う問題

生計維持分担とは家事分担と同様に、共働き家庭の夫と妻がお互い、生計(家計)を維持する役割をどの程度担っているかという見方である。

調べてみると、男性が生計維持分担している点では、ほとんどの家庭で妻も夫も合意していた。

ただ、妻の就業が生計維持分担であるかどうかを夫に問うと、妻だけのため一人の自己実現のためへの就業と考えている男性もいれば、夫婦ともに生計維持分担していると考えている男性もいる。



国際コースの学生たちには英語で「女性労働論」などを講義する

の力で集めている。最終的には、日本の男性労働者が長時間労働という労働規範をどう受容し、あるいはそれにどう抵抗できるか研究したい。女性の就労などの問題も結局、それがネックになっている。

小笠原 祐子(おがな)などを務め、11年4月(さわら・ゆうこ)昭和江戸川大学社会学部助58年3月上智大学外国教授、13年4月日本大語学部卒。米企業勤務 学経済学部助教授、17を経て、62年9月シカゴ大学同教授。日本社工科大学院社会学研究会、American Sociological Association、Sociological Association、組織士課程修了、社会学博士学会などに所属。著書士学位(Ph.D.)取得に「OLたちの(レジデント)国際基督教大学(中公文書)際関係学部非常勤講師 ほか。神奈川県出身。

海のユニバーサルデザインに取り組み

理工・近藤健雄教授



学生たちと市原市臨海部調査中の近藤教授

「ユニバーサルデザイン 老若男女といった差異を感ぜず利用することが、できる環境・工業デザインが言語の違いや左右の利き手の違い、障害の有無、近藤教授の研究室が取り組んでいるテーマの一方、海に行きたいという高齢者や障害者が7割いる。ただ、車いすや杖を突いて砂浜を歩くのは無理なんです」

「高齢化社会の中で海から人が遠のいていますが、アンケートをとってみると、海に行きたいという高齢者や障害者が7割いる。ただ、車いすや杖を突いて砂浜を歩くのは無理なんです」

人に優しい海辺を...

東京湾再生活動も展開

「高齡化社会の中で海から人が遠のいていますが、アンケートをとってみると、海に行きたいという高齢者や障害者が7割いる。ただ、車いすや杖を突いて砂浜を歩くのは無理なんです」

「高齡化社会の中で海から人が遠のいていますが、アンケートをとってみると、海に行きたいという高齢者や障害者が7割いる。ただ、車いすや杖を突いて砂浜を歩くのは無理なんです」

「高齡化社会の中で海から人が遠のいていますが、アンケートをとってみると、海に行きたいという高齢者や障害者が7割いる。ただ、車いすや杖を突いて砂浜を歩くのは無理なんです」

「高齡化社会の中で海から人が遠のいていますが、アンケートをとってみると、海に行きたいという高齢者や障害者が7割いる。ただ、車いすや杖を突いて砂浜を歩くのは無理なんです」



設計製図の授業で学生たちを指導

「高齡化社会の中で海から人が遠のいていますが、アンケートをとってみると、海に行きたいという高齢者や障害者が7割いる。ただ、車いすや杖を突いて砂浜を歩くのは無理なんです」

「高齡化社会の中で海から人が遠のいていますが、アンケートをとってみると、海に行きたいという高齢者や障害者が7割いる。ただ、車いすや杖を突いて砂浜を歩くのは無理なんです」

「高齡化社会の中で海から人が遠のいていますが、アンケートをとってみると、海に行きたいという高齢者や障害者が7割いる。ただ、車いすや杖を突いて砂浜を歩くのは無理なんです」

「高齡化社会の中で海から人が遠のいていますが、アンケートをとってみると、海に行きたいという高齢者や障害者が7割いる。ただ、車いすや杖を突いて砂浜を歩くのは無理なんです」

現代GPに採択

研究活動方針は「サムシンクニュー」。グローバルな視点で社会システムを観察し、常に「何か新しい提案」を試みようというスタンスだ。また学生には現地調査を踏まえた研究活動を求めている。その成果が表わされたのが、東京湾の環境再生への取り組み。

これまでに授業の一環として川崎市、館山市、木更津市、市原市の臨海部などの再生計画を提案してきた。17年度に木更津市と共に取り組んだ「現代的教育二一ス取り組支援プログラム」(現代教育二一ス取り組支援プログラム)にも採択された。

いま目指しているのは「東京湾大学」の設立。「仮想の大学です。日本が中心になり、東京湾環境学部とか海洋スポーツ

プロフィール

近藤 健雄(こんど)教授を経て平成7年(う・たけお)昭和45年授。国土交通省の東京湾漁業計画策定懇話会委員など各種委員会委員。著書に「環境創造」

「環境創造」

「高齡化社会の中で海から人が遠のいていますが、アンケートをとってみると、海に行きたいという高齢者や障害者が7割いる。ただ、車いすや杖を突いて砂浜を歩くのは無理なんです」

「高齡化社会の中で海から人が遠のいていますが、アンケートをとってみると、海に行きたいという高齢者や障害者が7割いる。ただ、車いすや杖を突いて砂浜を歩くのは無理なんです」